

エゼキエル書20章41節 「香しいいけにえ」

1A 受け入れない神

1B 犯し続ける罪

2B 罪による仕切り

2A 宥めの香り

1B 受け入れられる生贄

2B キリストによって受け入れられた者

本文

エゼキエル書 20 章 14 節を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、19 章まで来ました。午後に 20 章と 21 章を読みます。「**わたしがあなたがたを国々の民の中から連れ出し、その散らされている国々からあなたがたを集めるとき、わたしは、あなたがたをなだめのかおりとして喜んで受け入れる。わたしは、諸国の民が見ている前で、あなたがたのうちに、わたしの聖なることを示す。**」今日はこの、「喜んで受け入れる」というところに注目して見ていきたいと思います。私たちの神は、喜んでその存在を受け入れてくださる神です。

1A 受け入れない神

人から受け入れられる、受け入れられない、あるいは拒まれるということは、私たちにとって大きな関心事ですね。受け入れられないことに辛さは、とてつもなく大きなものです。私たち人間は、人に、ある集団に受け入れられるために、必死になって動いていると言っても過言ではありません。そのために、現在、よく使われる「同調圧力」があります。仲間から嫌われて、受け入れてもらえなくなることを恐れから来る、同調圧力を受けています。

しかし、人というのは必ず壁を作っています。自分を守るための壁を作っています。人から受け入れられることを求める生活は窮屈です。なぜなら、それぞれが壁を持っているので、どこかで拒まれるからです。それぞれが、自分の世界の中に入り込みます。今の社会は、そういった形で孤独になり、一人一人が分断しています。しかし、神は違うのです。天地を造られた神は、ご自分の形に人を造られました。この方は、ご自分が造られたというだけで、その存在を喜んでおられます。自分を創られた方に受け入れられることこそ、自分というもの、個を持つことができます。

1B 犯し続ける罪

けれども、一つ、人間には問題があります。それは神ご自身に対して自分が壁作りをしてしまっていることです。ここエゼキエル 20 章では、ユダヤ人の長老たちの何人かがエゼキエルの所に来て、主に願いを立ててもらおうとしてやってきたのですが、主は彼らを受け入れませんでした。「わたしは決してあなたの願いを聞き入れない。(20:31)」と言われます。その理由を、主は淡々と語

っておられます。はるか九百年ぐらい前から、イスラエルの民がエジプトにいて、その時に彼らは、忌まわしい偶像礼拝を行っていました。主が彼らを滅ぼそうとするも、その憐れみのゆえに、その手は引かれました。エジプトから出て、荒野の旅をしている時もエジプトで味わった偶像礼拝を行なったし、さらに約束の地に入って豊かな土地になったら、その周囲の住民の偶像を拝みました。そして何と、幼い子供たちを火のいけにえに捧げることまでしました。今でいう、快樂のための望まぬ妊娠をして、それで中絶をするのと同じです。

こうやって、神ご自身に心を向けるのではなく、神には心に壁を設けて、それで自分のしたいこと、その欲望を成し遂げることを求めていたので、願いがあったところで、主は、「わたしは聞き入れない」と言われます。

2B 罪による仕切り

神が自分を拒んでいるのではなく、自分の罪によって神を引き離しているのだ、ということ、イザヤを通して主は語られました。「イザヤ 59:1-2 見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」自分の罪が神の前に立ちはだかっているのだ、ということです。自分の罪があるので、自分がどんなに犠牲的な生活を送っても、それが受け入れられるということではないのです。ユダヤ人の人たちは、いけにえを捧げていたのですが、罪があるならどんな犠牲も忌み嫌うと主は言われました。「イザヤ 1:13-15 もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙・それもわたしの忌みきらうもの。新月の祭りや安息日・会合の召集、不義と、きよめの集会、これにわたしは耐えられない。あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、わたしは負うのに疲れ果てた。あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。」

私たちはとかく、犠牲的に動いていさえすれば、それが認められると思いがちです。けれども、いかがでしょうか、会社で多くの犠牲を払った人が、果たしてそれが正しいとされるでしょうか？ そうであることもあるかもしれませんが、動機が間違っていれば、その働きは忌み嫌われますね。「ちょっと、お休みされたいかがですか？ 熱心になればなるほど、かえって悪臭を放っているということがありますね。それはその人の動機が間違っているからです。自分自身のため、自分の欲望のために動いているためです。ですから、主はかえって嫌われるのです。

2A 宥めの香り

しかし主は、「**あなたがたをなだめのかおりとして喜んで受け入れる。**」と言われます。

1B 受け入れられる生贄

「宥めの香り」とは何でしょうか？ ここは「香ばしいかおり」とも訳すことができるものです。人が神

にささげる生贄が、とても香しいということになります。バーベキューをしたら、とても良い匂いがする、香ばしいかおりがしますね。それです。つまり、ここにあるように「喜んで受け入れる」ということです。主が初めに宥めの香りを受けられたのは、ノアが洪水の後に箱舟から出て来た時のことです。「創世 8:21 主は、そのなだめのかおりをかがれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。」このように、火によるいけにえが主に宥めの香り、喜んで受け入れられる生贄となっています。

そして、捧げる香りとして、祭司が幕屋において特別な調合法による香を作るように命じられているところがあります。それで香油を作ったり、主の箱のところに供えます。これもまた、もちろん香しいかおりがそこを立ち込めます。ちなみに、これは、様々な種類の香料を使い、その香を細かに砕いて、主の箱の前に供えます。

2B キリストによって受け入れられた者

私たちは、このような香りを放つものとして、神の前に出ていくことができればよいのですが、先に話したように、自分が良いことをしていると思っても、実は逆に悪臭を放っているということがあります。では、どのような犠牲を払うべきか？と考えれば考えるほど、頭打ちがきます。自分が最善だと思っている善行でさえ、主の前では不潔な着物であるという言葉さえあります。それは、自分の内に罪があるからです。

実は私自身のことを思って、話しています。私が中学生の時は、勉強にも部活にも励みました。けれども高校に入ってからスランプが始まりました。けれども、幸いにして指定校推薦で少し早めに大学に合格しました。かなり精神的にやられていたので、神の憐れみを思います。そして大学生活でうまくいかなかった分を取り戻そうと思いました。何か打ち込めるものとして、英語のサークルで討論を選びました。それは二人一組でやるのですが、パートナーに嫌われ、周囲の仲間に冷たい目線で見られました。自分は純粋に頑張っていたつもりなのが、それがかえって嫌がられていたのです。

そこで主は、まるで着物を着せてくださるように、神に受け入れられる犠牲を私たちに着させてください。それは、キリストの行なわれた義です。「エペソ 1:6 それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」ここで、「その愛する方によって、私たちが受け入れられた恵みの栄光」と訳すことができるところです。キリストにあって神が私たちを受け入れてくださった、ということです。これが、すぐれた恵みです。

キリストの生涯は、父なる神に受け入れられ、香しいかおりを放っているものです。イエス様が、バプテスマのヨハネからバプテスマを受けて、水から上がられると、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイ 3:17)」と言われました。主イエスの生涯は、その犠牲の生涯は香し

いかおりを放っていました。全焼のいけにえのようになりました。「ピリピ 2:6-8 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」

私たちは、キリストを見る時に、人の罪、自分の罪の赦しのために身代わりに死ぬという犠牲を見る時に、それこそが神に香しいかおりになっているのだということが分かります。パウロは、キリスト者に愛のうちに歩みなさいと言い、さらにこう言っています。「エペソ 5:2 また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおさげになりました。」私たちは、イエス・キリストについての映画を思いません。映画がその全てを物語ることは決してできません。しかし、そこで血を流し、肉体がちぎれて、茨がかぶされ、そして最後に十字架に釘打たれているそのお姿は、本当の香しさを放っています。

そして、この方に結ばれることこそが、神に受け入れられ、喜ばれるいけにえとなることができます。この方の内にいることによって、それで自分の正しさではなく、キリストの義を身にまわっているので、神が喜んで受け入れてくださるのです。それはちょうど、王と結婚した女のように。自分がたとえ田舎娘だったとしても、王との結婚が許され、王のゆえに自分が王妃の輝きをもっているというのと同じです。キリストの香しいかおりが、イエス様との結びつきで私たちのうちから放たれるのです。結ばれるのは、キリストを信じ、心で受け入れることにとって可能になります。

自分で自分の中身をきれいにすることはできません。しかし、この方の流された血によって、良心から清められます。また神のくださる霊によって、心の底から洗われます。キリストと結ばれることによって、確かに自分が香しいかおりを放つ、捧げ物になるのです。「ローマ 12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」神の憐れみにゆえに、救われた者たちは、神に受け入れられる生きた供え物として捧げます。その生活は実に香しいです。主が喜んで受け入れてくださいます。

今、私たちが生きている社会は、「いかに受け取り、得をするか？」という価値観に成り立っています。何かをする時は、自分にとって得なものを選びますね。しかし、人というものは捧げることによって、価値が決まります。その犠牲が純粹で、混じりけのないもので、どのようにして受け入れられるものとなるのでしょうか？まず、イエスを自分の救い主として信じるという犠牲を払ってください。この方に従う決意をするということ自体が、大きな犠牲を伴います。そして、この方と共に歩む決断をして、自分を神に捧げてください。その人の人生は、香しい供え物です。